

京都国立博物館

だより

二〇二五年
一〇・一一・一二月号



KYOTO NATIONAL MUSEUM

2025 October to December vol. 228

特別展
宋元仏画

— 蒼海を越えたほとけたち

特集展示

光琳かるたと小西家伝来

尾形光琳関係資料

新春特集展示

うまづくし

— 干支を愛でる —



【特別展】

宋元仏画

— 蒼海を越えたほとけたち —

9月20日(土)～11月16日(日)

主な展示施設
前期：9月20日(土)～10月19日(日)
後期：10月21日(火)～11月16日(日)
※会期中、一部の作品は右記以外にも展示替えを行います。

【平成知新館】

日本に残る宋元仏画

「宋元仏画」とは何か――、簡単に言ってしまうえば中国の宋時代、元時代に制作された仏画（仏教絵画）というのが第一義的な意味となります。この度の展覧会に並ぶ宋元仏画は、仏法を求めて隣国に渡った先人たちによって日本へもたらされ、長い間大切に守り伝えられてきたものです。阿弥陀如来や釈迦如来、観音菩薩に地藏菩薩、羅漢に布袋に十王……日本の仏画でもおなじみのほとけたちが登場しますが、これらは寺院で祀られただけでなく、多くが日本での仏画制作において手本とされてきました。

深く日本文化に浸透し、いまに残る宋元仏画ですが、これほど充実した質と量を伝えているのは日本だけです。中国では、古くなった仏画は新しいものに替えられることが一般的でしたし、大事に伝えられていたとしても、寺院や宗派、地域、そして王朝に変動があれば、流出したり滅失したりと、長い期間維持することは容易ではありませんでした。また、山水画や花鳥画など鑑賞画の場合は、収蔵家たちのコレクションの中で大切に残されましたが、宗教画である仏画は収集の対象ではなく、遺跡や地中で人知れず保存されていない限りは、宋や元の時代の仏画が長く伝世するのは極めて稀なことなのです。今回の展覧会では、この貴重な宋元仏画を一堂に会し、隣国の仏教美術の粋を見渡すとともに、仏教で結ばれた東アジア世界の文化の交流を振り返ります。

多種多様な仏画

展覧会のメインビジュアルとしてたち並ぶ「孔雀明王像」（国宝、京都・仁和寺）と「観音猿鶴図」の中幅をなす観音像（国宝、京都・大徳寺）。宋元仏画の中でもひときわ麗しい姿のこの二尊ですが、一方は多様な法具を手にも三面六臂の威容をあらわした密教のほとけであり、もう一方は静寂のなかで悟りを求めて瞑想する禅宗のほとけです。鮮やかな着彩画と静謐な水墨画という対照的な表現も魅力です。一言に「宋元仏画」といっても、背景とする信仰や、その理想的な姿をあらわす表現は多様で奥深いものとなっています。

たとえば普悦という画僧の描いた「阿弥陀三尊像」（国宝、京都・清浄華院）と、淳熙十年（一一八三）に制作された「阿弥陀浄土図」（重要文化財、京都・知恩院）は、いずれも阿弥陀如来・観音菩薩・勢至菩薩の三尊を描いており、中国の浄土教における阿弥陀信仰と深くかわる仏画です。しかし、普悦による阿弥陀三尊像が、明瞭な輪郭をあらわさず、まるで光の中にほとけが立ち現れてくるような夢幻的な印象を与える画像である一方、淳熙十年製の阿弥陀三尊は、豊かな色彩で鮮明に描かれ、浄土の風景をわかりやすく示しています。前者は熱心な修行者が心の中でみた阿弥陀の姿、後者は阿弥陀浄土を思い描くトレーニングのための道場と関係する画像と考えられています。

「宋元仏画」とどう暮らす

展覧会の中に、宋と元だけでなく、高麗の仏画が含まれていることを不思議に思われるかもしれません。高麗は、中国に宋と元が興亡していた時期に、朝鮮半島に長く栄えていた仏教国家です。宋、元、高麗、そして日本は仏教を通じて互いに交流を持っていました。高麗で制作された仏画は、現在一七〇件ほど確認されているといいますが、多くは宋元仏画と同様に、日本に伝来してきたものです。繊細で美しい文様に彩られた高麗仏画は、当時の真摯な信仰の姿を伝えており、宋や元の美術を参照しながら独自に洗練を重ねました。日本に舶載されたのち、外国の絵画が「唐絵」として一緒に整理される中で、宋元仏画と高麗仏画は混同されてきましたが、近年の研究成果を受けて本展ではそれぞれの特色や共通性などを見渡します。

展覧会は、さらに道教・マニ教といった他宗教の画像も視野に入れながら、多角的に宋元仏画に迫る構成となっています。これだけ多くの文脈で語れるほどに、豊かな様相を持った仏教絵画の一群が、日本に残されていることを知っていただく機会となれば幸いです。

（森橋なつみ）



重要文化財 北斗九星像 滋賀・宝厳寺 (後期展示)



重要文化財 寒山拾得図 伝顔輝筆 東京国立博物館 (前期展示)



重要文化財 寒山拾得図 狩野山雪筆 京都・真正極楽寺 (真知堂) (前期展示)



十字架持持マニ像 山梨・栖雲寺 (前期展示)



万五千仏図 広島・不動院 (後期展示)



万五千仏図 部分拡大



重要文化財 枯木猿猴図 (右幅) 長谷川等伯筆 京都・龍泉庵 (後期展示)



重要文化財 摩利支天像 (帝釈天像) 京都・聖澤院 (後期展示)



重要文化財 夢堂曇首贊 四應図 平石如砥・華国子文・東京国立博物館 (後期展示)



重要文化財 玄沙接待利生図 京都国立博物館 (後期展示)



重要文化財 五百羅漢図 勘進五百羅漢 林庭珪・周季常筆 京都・大徳寺 (後期展示)



重要文化財 仏涅槃図 陸信忠筆 奈良国立博物館 (後期展示)



重要文化財 阿弥陀浄土図 京都・知恩院 (前期展示)



国宝 孔雀明王像 京都・仁和寺 (前期展示)



国宝 観音猿鶴図 牧稲筆 京都・大徳寺 (後期展示)



国宝 阿弥陀三尊像 普悦筆 京都・清浄華院 (後期展示)



3F 1 陶磁

【明末清初の五彩磁器】

【日本と東洋のやきもの】

12月16日(火)～令和8年3月15日(日)

平成知新館 名品ギャラリー

【特集展示】

光琳かるたと 小西家伝来尾形光琳関係資料

12月16日(火)〜令和8年2月1日(日)

【平成知新館2F・4・5】



竹虎図 尾形光琳筆 京都国立博物館

京都国立博物館には、「小西家伝来尾形光琳関係資料」(以下、「小西家資料」と呼ばれる資料群が所蔵されています。これは、尾形光琳(一六五八〜一七一六)の子、寿市郎が養子に入った小西家に伝来したもので、光琳の生家である呉服商雁金屋に関わる文書のみならず、尾形家の経済・生活等に関わる文書、さらには光琳の画稿・図案類までもが多数含まれる、きわめて貴重な資料群です。現在、全体の約九割にあたる五三〇点が当館の所蔵となっており、残る部分を大阪市立美術館が所蔵、これに散逸分が加わって全体を構成しています。江戸時代前期に活躍した画家で、これほど多くの資料がまとまって伝存しているケースはほかに見当たりません。

「小西家資料」からは、光琳の私生活を含むさまざまな情報を知ることができます。たとえば、光琳が父宗謙から相続した莫大な遺産のこと、女性関係のトラブルから訴えられ、多額の手切れ金を支払ったこと、弟の乾山から借金返済を迫られていたこと…。放蕩の限りを尽くした光琳が画家としての道を選んだのは、主として経済的な困窮が理由だったと考えられています。そんなことがわかるのも、この「小西家資料」のおかげなのです。

ところで、近年当館に新たに寄託された「小倉百人一首歌留多」は、光琳が手掛けた小倉百人一首かるたとして名高く、「光琳かるた」の愛称をもって知られています。和歌の上の句を記す読み札には歌人の肖像が、下の句を記す取り札には和歌にちなむ歌意絵が描かれており、一枚ずつ絵柄の異なる計二百枚のかるたは、さながら精巧な工芸品。流麗な書ともども、まるで宝石のような輝きを放っています。

実は、当館所蔵の「小西家資料」には、この光琳かるたの画稿が含まれています。このたびの特集展示では、光琳かるた二百枚を一堂に展示するとともに、その画稿もあわせて展示いたします。両者を比較しながらご覧いただける、またとない機会です。加えて、他の「小西家資料」および関連作品も展示し、光琳芸術の基層とも言うべき同資料の魅力と重要性を紹介します。(福士雄也)



小倉百人一首歌留多 尾形光琳筆



重要文化財 百人一首画稿 (小西家伝来尾形光琳関係資料のうち) 尾形光琳筆 京都国立博物館

3F・2 考古

【京都北部の考古資料】

【日本の考古資料】

12月16日(火)〜令和8年3月15日(日)

2F・1・3

【新春特集展示 うまづくし ―干支を愛でる―】

12月16日(火)〜令和8年1月25日(日)

2F・4・5

【特集展示 光琳かるたと
小西家伝来尾形光琳関係資料】

12月16日(火)〜令和8年2月1日(日)

1F・1 彫刻

【平安時代の仏像】

【神像と師子・狛犬】

12月16日(火)〜令和8年3月22日(日)

1F・2

【特集展示 薩摩島津氏と東福寺即宗院】

12月16日(火)〜令和8年1月25日(日)

1F・3 書跡

【東福寺の墨蹟】

12月16日(火)〜令和8年1月25日(日)

1F・4 染織

【染織の文様―吉祥―】

12月16日(火)〜令和8年2月1日(日)

1F・5 金工

【奉納された鏡・華鬘・鎧】

12月16日(火)〜令和8年2月1日(日)

1F・6 漆工

【京都が生んだ洗練の形
―美濃屋漆器コレクション―】

12月16日(火)〜令和8年2月1日(日)

うまづくし

「千支を愛でる」

12月16日(火)

令和8年1月25日(日)

【平成知新館 2F-13】



作品を見るのが楽しくなるワークシート(小学校低学年)



やさしい解説文(小学校高学年)



令和8年の「千支を愛でる」もファミリー向け!



重要文化財 駿馬図 兼徳 周 麟賛 京都国立博物館



重要文化財 駿馬図 兼徳 周 麟賛 京都国立博物館



重要文化財 駿馬図 兼徳 周 麟賛 京都国立博物館



重要美術品 三彩馬橋 鎌高衣子氏寄贈 京都国立博物館

来年の千支は午(馬)ですね。みなさんは馬を近くで見ることがありますか? 今見る機会が減りましたが、昔は、馬は人の身近にいる生き物でした。人を乗せて走ったり、重たい荷物を運んだり、さまざまな力仕事をしていました。馬は人を助けてくれるだけでなく、堂々として、優雅な姿をしているので、昔から人々の心をひきつけてきました。

武将たちが憧れたカッコいい馬や、馬を飾った馬具、行事やスポーツで活躍する馬、神様にさげられた馬など、この展示では、馬に関係するさまざまな文化財をご紹介します。ワークシートを片手に、どんな馬たちがいるか探しに行ってみましょう。

(水谷亜希)



重要文化財 駿馬図 兼徳 周 麟賛 京都国立博物館

京都国立博物館主任研究員 上杉智英

レンズを通して見えるもの

目付も変わろうという深夜、わが家に衝撃が走る。レンズ豆である。見るともなく点けていたテレビが告げる。「レンズの形をした豆だからレンズ豆ではない。レンズ豆の形に似ていたからレンズと名付けられた」と。何ということだろう。今までずっと「あのレンズの形をした小さい豆」と言っていたのが逆だったなんて!

凸レンズを通して物体をスクリーンに映すと上下・左右が逆に見える。私の目も然り。水晶体を通して網膜に結ばれる像は上下・左右、逆さまに映る。それを脳が上手いことやってくれているだけであって、実は私が見ているもの、思っていることと、上下・左右・前後・因果が本当は逆であることなんかは、案外よくあることなのかもしれない。

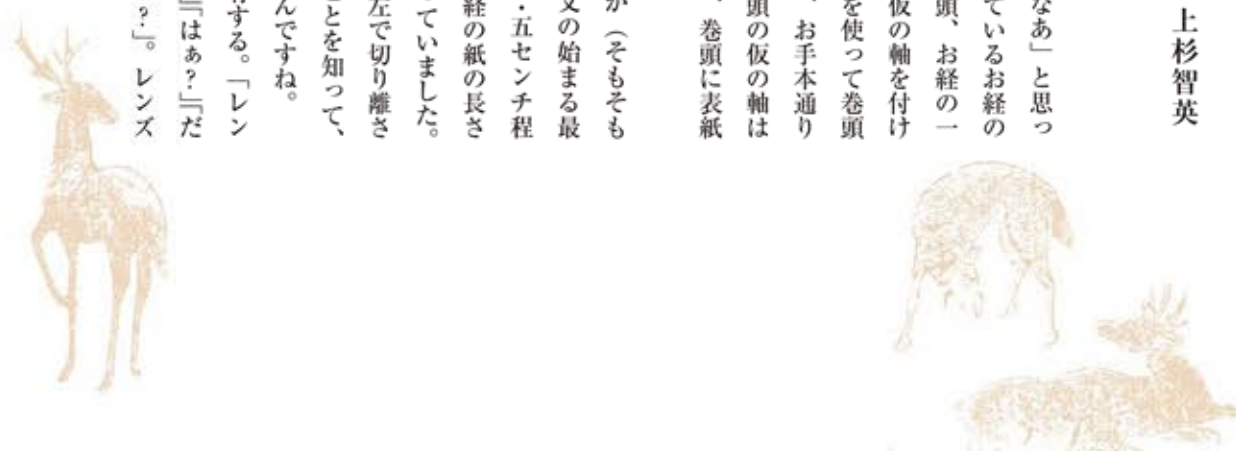
「えっ、そうなんだ」とよく言われるのが巻物(巻子本)の形をしたお経の制作手順。一枚一枚バラバラの紙に書き写してから、糊で繋ぎ合わせると思われている方が多いのですが、正倉院に伝わる奈良時代の写経に關する記録「写経所文書」を見てみると、実際には逆で、先に紙を二十枚くらい繋ぎ、経文を開き枠線(界線)を引いてから書き写したことが分かります。確かにお経の上と下に引かれた細い横線をたどると紙継ぎ部分でも真つ直ぐ繋がっており、線を引いて繋いだのではなく、繋いでから線を引いたことが見て取れます。

× 界線引く ↓ 書写 ↓ 紙を繋ぐ
○ 紙を繋ぐ ↓ 界線引く ↓ 書写

「先に紙を繋ぐということは、その時に軸も付けたのかなあ」と思った鋭いあなた、正解です。でも、その軸は今、私たちが見ているお経の最後尾、巻末に付いている軸ではありません。実は真逆の巻頭、お経の一番始めに仮の軸が付けられます。十〜十五センチ程の紙に仮の軸を付けて、お経を書き写す本紙の前に糊付けします。この仮の軸を使って巻頭から書き写しては巻いていく訳です。お経の書写が終わる、お手本通りに書き写しているかのチェック(校正)が二回済むと、巻頭の仮の軸は切り離され、私たちが今見ている正式な軸を最後尾に付け、巻頭に表紙が付けられて、お経の形、巻子本と相成ります。

お経の調査をしたことがある人にはあるあるなのですが(そもそも「お経の調査をしたことがある人」がないのか?)、本文の始まる最初の第一紙目は、必ずその後の第二紙以降より二・〇〜二・五センチ程度(二〜一行半くらい)短いのです。大学院生時代からお経の紙の長さを測ってきましたが、ずーっとなんでだろうと不思議に思っていました。この巻頭の仮の軸の存在を知り、それが糊付け部分の少し左で切り離されること、つまり第一紙の右端がわずかに切り取られることを知って、目から鱗が落ちました。ものの形にはちゃんと理由があるんですね。

さて、新しい知の獲得に震え、妻を起こして感動を共有する。「レンズ豆はレンズじゃないんだ! レンズ豆がレンズ豆なんだ!」はあ? 「だからあ……」「じゃあレンズ豆のレンズって何よ?」「えっ?」。レンズ豆の鱗はまだまだ落ちそうにない深夜の二時でした。



講座・イベント

《特別展「宋元仏画—蒼海を越えたほとけたち」記念講演会》

9月27日(土)「幻視と示現—宋元仏画の視覚表象—」

九州大学名誉教授 井手誠之輔 氏

10月11日(土)「戦国武将と宋元画」

京都国立博物館企画室長兼美術室長 羽田聡

10月25日(土)「奮然請来の仏典とその影響」

京都国立博物館主任研究員 上杉智英

11月8日(土)「宋元の道釈人物画—境界をうつろう聖者—」

京都国立博物館研究員 森橋なつみ

※平成知新館 講堂にて13時30分～15時に開催。定員200名、聴講無料(ただし講演会当日の特別展観覧券が必要)。

※参加ご希望の方は、各講演会3日前12時までに京都国立博物館ウェブサイト(https://www.kyohaku.go.jp/events/mem/202509-11_songyuan-1ec/)よりお申し込みください。事前申し込み制、先着順(定員になり次第受付終了)。

《国際シンポジウム》

特別展「宋元仏画」開催記念国際シンポジウム

「日本に請来された“宋元仏画”をめぐる」

日時:10月17日(金)9時～17時 会場:平成知新館 講堂/オンライン(予定)

詳細は京都国立博物館ウェブサイト(<https://www.kyohaku.go.jp/>)をご覧ください。

《御家流 秋の香道体験》

日時:11月3日(月・祝)10時～、13時～、15時～ ※各回約90分

会場:茶室「堪庵」(京都国立博物館 東の庭奥)

定員:各10名 講師:御家流師範 加藤曉輝

参加費:無料(ただし、当日の特別展観覧券が必要)

参加方法:10月2日(木)10時より、京都国立博物館ウェブサイトからお申し込みください。

※先着順、定員になり次第受付を終了します。

https://www.kyohaku.go.jp/jp/events/event/20251103_incense/

《秋の茶室「堪庵」特別公開》

茶室「堪庵」は、昭和33年(1958)に上田堪一郎氏より当館へ寄贈された、江戸時代初期の京都における、公家文化の伝統を受け継いだ数寄屋造りの建物です。趣あるこの茶室に、期間限定でお上がりいただけます。

期間:11月18日(火)～11月24日(月・祝)

会場:茶室「堪庵」(京都国立博物館 東の庭奥)

詳細は京都国立博物館ウェブサイト(<https://www.kyohaku.go.jp/>)をご覧ください。

《土曜講座》

12月20日(土)「うまづくし—いつも身近に馬がいた」

京都国立博物館主任研究員 水谷亜希

※平成知新館 講堂にて13時30分～15時に開催。定員200名、聴講無料(ただし講演会当日の観覧券等が必要)。

※当日9時30分より、平成知新館1階インフォメーションにて整理券を配布し、定員になり次第配布を終了します。

これからの展覧会

◆特集展示 雛まつりと人形

令和8年(2026)2月7日(土)～3月15日(日)

◆特別展 北野天神

令和8年(2026)4月18日(土)～6月14日(日)

京都国立博物館の庭園をめぐるアプリケーション

「京博庭園ナビ」

「京博庭園ナビ」は、お持ちのスマートフォンやタブレットを使って、京都国立博物館の庭園を楽しんでいただける無料のアプリケーションです。屋外展示や建物など、特定のスポットにカメラをかざすと、解説やARが表示されます。ご来館の際にぜひご利用ください。

利用可能時間:9:30～16:30 料金:無料(ただし、当日の観覧券等が必要)

※館内ではフリーWi-Fiをご利用いただけます。

※パソコンでは正しく動作しません。

詳しい利用方法はこちら

<https://www.kyohaku.go.jp/jp/learn/museum/garden-navi/>

◆名品ギャラリーの休止予定◆

特別展とその前後を含めた期間は、展示作業等のため、名品ギャラリーを休止しております。ご来館の皆様にはご不便をおかけいたしますが、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

名品ギャラリー 休止期間:11月18日(火)～12月14日(日)

※上記期間中は庭園のみ開館となります。

ご利用案内

【開館時間】<9月20日～11月16日>9:00～17:30

<11月18日～3月22日>9:30～17:00

※全曜日は20:00まで開館

※入館は各開館の30分前まで

【観覧料】【特別展「宋元仏画—蒼海を越えたほとけたち」】

<9月20日～11月16日>

一般2000円(1800円)、大学生1200円(1000円)

高校生700円(500円)

※()内は団体20名以上、中学生以下、障害者の方とその介護者1名は無料(要証明)。

※キャンパスメンバーズ(教職員を含む)は学生証または教職員証をご提示いただくと、各種当日通常料金より500円引きとなります。

【庭園のみ開館期間】<11月18日～12月14日>

一般300円、大学生150円

※高校生以下および満18歳未満、満70歳以上無料、障害者とその介護者1名は無料(要証明)。

※キャンパスメンバーズ(含教職員)は学生証または教職員証をご提示いただくと、無料となります。

※有料(一般のみ)にてご入館の方には、庭園ガイド冊子がつきます。

【名品ギャラリー】<12月16日～3月22日>

一般700円、大学生350円

※高校生以下および満18歳未満、満70歳以上無料、障害者とその介護者1名は無料(要証明)。

※キャンパスメンバーズ(含教職員)は学生証または教職員証をご提示いただくと、無料となります。

【休館日】月曜日(月曜日が祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)、12月29日(月)～令和8年1月1日(木・祝)

アクセス

JR=京都駅下車、市バスD2のりばより206・208号系統にて博物館三十三間堂前下車すぐ

プリンスラインバス京都駅八条口のりばより京都女子大学前行にて東山七条下車、徒歩1分

近鉄電車=近鉄丹波橋駅下車、京阪電車丹波橋駅から出町柳方面行にて七条駅下車、東へ徒歩7分

京阪電車=七条駅下車、東へ徒歩7分

阪急電車=京都河原町駅下車、京阪電車紙園四条駅から大阪方面行きにて七条駅下車、東へ徒歩7分

駐車場は有料となっております。ご来館の際は、公共交通機関をご利用ください。

※「博物館だより」を郵送ご希望の方は、返信用封筒(角2封筒は140円、長3封筒は110円)切手貼付、宛名明記)を同封して、当館企画室までお申し込みください。



公式サイト

<https://www.kyohaku.go.jp/>

X (旧 Twitter)・Instagram

@KyotoNatMuseum

トラりん公式サイト

<https://www.kyohaku.go.jp/jp/torarin/>

〒605-0931 京都市東山区茶屋町 527

TEL. 075-525-2473 (テレホンサービス)

発行日 令和7年10月1日 デザイン 谷なつ子

編集・発行 京都国立博物館 印刷 岡村印刷工業株式会社

京都国立博物館
KYOTO NATIONAL MUSEUM

